

Hokkaido University Institute for the Advancement of Higher Education

ニュースレター



北海道大学 高等教育推進機構

Newsletter No. 110

ワークショップ「授業運営の苦悩～解決策を探る～」を
開催 (5 ページ)

シンポジウム「アクティブラーニングは日本の教育を
変えるのか」を開催 (12ページ)

特別講義「大学と社会－先輩からの熱いメッセージ－」
を開講－12人の卒業生が後輩に熱弁－ (21ページ)

札幌クリエイティブコンベンション “NoMaps” に、
子ども向けサイエンスワークショップ
「没入！バーチャル支笏湖ワールド」を出展 (27ページ)
(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

全学教育と教養部

高等教育推進機構副機構長 白木沢旭児

旧教養部の思い出

このたび全学教育部長・総合教育部長に就任しました白木沢旭児と申します。私は、1990年10月に北大文学部に教員として採用され、それから27年目を迎えています。北大の教員のなかでも古株になってしまいましたので、まず、全学教育の前史から書かせていただきます。

私が北大に着任した当時は、教養部（官制化されていない）が存在しており、学生は2年次の1学期

まで教養部（文Ⅰ、文Ⅱ、文Ⅲ、理Ⅰ、理Ⅱ、理Ⅲなど）に属していました。授業を行う教官は、所属学部はそれぞれでしたが、基本的にみな「教養教官」でした（主に現在の責任部局に所属していました。）。私が所属した文学部日本史学講座は、特

別な慣習があり、教養教官と学部教官が両者合同で学部の講座を運営していました。そのため、教養教官が課せられたノルマである1年・2年次向け教養科目5～6コマ（講義および演習）を6人の講座メンバーで1コマずつ担当していました。私自身は、学部（当時は教養教官と区別して「小講座」所属と称した）教員でしたが、講座の慣習にしたがい、着任時から毎年、教養の授業を1コマ担当しています。

27年前の教養部は、現在と雰囲気が異なります。授業は、各教官がそれぞれ気ままに自由に行っており、学生も適当に授業に付き合っていました。ただ、年に一度、教養担当教官が極度に緊張するときがありました。『五右衛門』の刊行時です。北大生協北都店の書籍コーナーに6月くらいでしょうか、わら半紙（ザラ紙）に手書き原稿を印刷して、ホッチキス止め製本された『五右衛門』が山積みされています。教養部の授業の帰りに買って帰るのですが、開けるのには若干の勇気がいりました。文学部教授会では、気の利いた教授が『五右衛門』を持参し、会議中に回し読みに供します。

この時代には、授業評価は、学生の自主的活動として行われていました。『五右衛門』別名「鬼仏帳」です。その後、紙媒体はなくなり、インターネット上にあるようですが、今にして思えば、実に的確・適切な授業評価でした。当時は、シラバスもありません。学生は、『五右衛門』をシラバス代わりにしていたのです。

全学教育の開始

1995年（平成7年）から、教養部はなくなり、学生はすべて学部所属となりました。1年次の教養課程の授業は、全学教育という呼称のもとに、全学支援方式（いわゆる「北大方式」）で行われるようになります。文学部では、このときから、責任部局として割り当てられた百数十コマを全教員（教授、助教授。のちに助教も加わる）で均等に負担するという方式が始まり、現在も続いています。ノルマは教員数を上回るので、一人の教員が1コマまたは2コマ負担するという体制です。

教養部から高等教育機能開発総合センターに変わり、印象的なのは授業をしに行く教員の居場所ができたことです。教養部時代は、授業担当者の多くは教養部の建物内に研究室を持っていたから、授

業を行うための控え室は不要でした（非常勤講師室はあったようですが）。全学教育体制に移行して、授業担当者は、全部局からわざわざ授業を行うためにやってきますから、控え室が必要です。現在の全学教育スタッフ室ができ、冷暖房完備でコピー機や印刷機もあり、快適な環境となっています。

また、全学教育の授業で好印象なのは、各教室の黒板が長くて大きいことと、チョークが常に新しい状態で準備されていたことです。当時、学部の授業の際には教室のチョークはほとんどないことが普通だったので、毎回、事務室に寄って新しいチョークを持って行きましたが、高等教育機能開発総合センターの授業はいつも新品が揃っていました。今にして思うと、全部の教室のチョークを補充する作業だけでも大変な仕事だと思いますが、どなたかが業務としてやり続けていたのでしょう。

総合教育部の発足

全学教育のその後の歩みを見ますと、2011年（平成23年）の総合入試への移行（総合教育部の発足）が大きな変革でした。学生の所属は旧教養部に類似したものになりましたが、問題は教員組織です。かつての教養教官を復活させるのか否かということは、改革の過程で議論されたはずですが、結論は、教養教官はつくらない、ということです。かつての教養部は官制化されていないとはいえ、教授会（教養部教官会議）、教務委員会、学生委員会等をもちクラス担任も教養教官の仕事でした。総合教育部の発足に際して、学生は総合教育部に所属させるが、それに対応する固定した教員組織をつくらない、というのはきわめて大きな決断だと思います。北大の教養部の長い歴史を振り返ると、教養教官の制度は、プラス面よりもマイナス面の方が大きいと評価されているでしょう。

今年度は、全学教育部長と総合教育部長を兼ねさせていただいていますが、1年目の途中で痛感させられたのは、固定した教員組織がないことの問題です。もちろん、高等教育推進機構学務委員会を頂点として、各専門委員会が機能して、1年次学生の教育に責任を持つ体制にはなっています。ただ、自分が所属する学部の教員組織と学生との関係と比べたときに、現在の総合教育部の体制はきわめて脆弱なものだと思います。その結果、かつての教養教官を

代替するものはクラス担任ということになっており、学部縦割り時代よりもクラス担任の仕事と責任は重くなっています。

全学教育部長・総合教育部長として、心がけたいことは、全学教育の授業担当者およびクラス担任がふだん行っている教育活動を、既存の全学教育・総合教育の各専門委員会が十分に認識できるようにすることです。一つの部局に集められた教員がお互いに顔が見える同僚として授業も学生指導も管理運営も行っているという各学部の体制に比べ、授業担当者は全部局にわたり膨大な人数にのぼり、クラス担

任も全学部から出ています。意思疎通は大変ですが、少しでも各専門委員会が授業担当者、クラス担任の経験や意見を知ることができるような運営を工夫したいと思います。

頻繁に全学教育部長名で文書がメール送信され、次から次へと用務をお願いしているようで、大変心苦しいのですが、固定した教員組織をつくらない、という決断のもとに全学の教員の尽力により成り立っている組織ですので、ご理解ご協力のほど、お願い申し上げます。

全学教育 GENERAL EDUCATION & 総合教育 FIRST YEAR EDUCATION

学務委員会報告

平成29年7月27日(木)、8月31日(木)にそれぞれ平成29年第1回、第2回の学務委員会が開催され、以下の議題が審議されました。

平成29年度第1回学務委員会

議題1 平成30年度全学教育科目の開講計画について

全学教育科目の開講数は、平成30年度はほぼ例年通りの内容で了承されました。なお、教員数が減少しているので、開講数を減じるべきだとの意見も出され、平成31年度開講数は見直す予定であることを説明し了承されました。

議題2 全学教育科目における学生からの成績評価に対する申立て制度の取扱いについて

現行の制度では、直接授業担当教員に相談することを求めているが、機関別認証評価のなかで、改善を求められていたので、これを削除することが諮られた承されました。

平成29年度第2回学務委員会

議題1 大学以外の教育施設等における学修のうち文部科学大臣が定める学修を全学教育科目の授業科目の履修とみなし単位を与える場合の

取扱要項の一部改正について

議題2 北海道大学の第1年次の学生に係る履修、修学等に関する規程の一部改正について

議題3 北海道大学基礎クラス担任制度の実施に関する要項の一部改正について

議題4 国立大学法人北海道大学高等教育推進機構学務委員会総合教育教務・学生専門委員会内規の一部改正について

議題はすべて、平成29年10月からスタートするインテグレイテッドサイエンスプログラム(以下ISPと略)に関する規程改正です。議題1では、ISP入学者を対象に行う日本語能力試験を単位認定できるものに加えるということです。議題2は、ISP規程に委ねる条項について北海道大学の第1年次の学生に係る履修、修学等に関する規程を適用しないことを定めるものです。議題3は、ISP学生はまとまって1クラスを構成することおよびクラス担任の選出方法を定めたものです。議題4は、ISPクラスのクラス担任を総合教育教務・学生専門委員会の委員とすることを定めたものです。これらは、すべて了承されました。

(白木沢 旭児)

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

講演会「多様な学習動機への対応」を開催

7月21日（金）16時45分から90分間、情報教育館3階スタジオ型中講義室において、山本による講演会「多様な学習動機への対応」を開催し、12大学から38名の教職員にご参加いただきました。

学生の学習動機は非常に多様であり、さまざまな要因が学習意欲に影響を与えています。教員に起因する要因があれば学生に起因するものもあって、さらに人によっても異なるものです。本講演会では、それら多様な学習動機があるということを紹介し、教員ができること、すべきことについてお話ししました。大学生の学習意欲については大きな問題となっていますが、全員の学習意欲を高めることができる万能な解決法などはありません。まずは学習動機の多様性を理解することが重要だと思います。

参加者のアンケートからは「学習動機についてメタ的に理解することができ、冷静に考えるチャンスとなりました」「『時には強制を働かせ、外発的動機を与えることも必要』とは、最近の自分の問題意識とも合致していたので、確認できてよかったです」などという声がありました。

（山本 堅一）



写真1 学習動機の分類について説明する講師



写真2 参加者同士で議論する様子

講演会「Practical use of IR data, and training researchers in charge of IR」を開催

8月10日（木）14時から120分間、情報教育館3階スタジオ型中講義室において、講演会「Practical use of IR data, and training researchers in charge of IR」を開催し、7大学から31名の教職員にご参加いただきました。

IR（Institutional Research）に関してはアメリカが進んで取り組んでいますので、ニューヨーク市立大学ラガーディアコミュニティカレッジでIRの上級高

等教育研究員を務め、近年はアメリカのAssociation for Institutional Researchにおいて委員なども担っているErez Lenchner先生を講師に招き、アメリカでのIRデータの活用方法とIR研究者の育成についてお話しいただきました。また、本学の宮本淳先生に北海道大学の取り組みについてお話しいただいたことで、他大学の方に参考にしていただくことができました。

参加者のアンケートからは「アメリカの先進的な事例を直接聞くことができてよかった」「国内での今後の動向についての情報を得ることができまし

た」などという声がありました。

(山本 堅一)



写真1 北大の取り組みについて紹介する宮本先生

写真2 エレス先生に質問する参加者の様子

ワークショップ「授業運営の苦悩～解決策を探る～」を開催

8月18日（金）13時30分から120分間、情報教育館4階共用多目的教室(2)において、山本をファシリテーターとしてワークショップ「授業運営の苦悩～解決策を探る～」を開催し、6大学から11名の教員にご参加いただきました。

本ワークショップは、授業改善のためにさまざまな努力をしているにもかかわらず、それが受講生に伝わらないといった方を対象に、同じ悩みを抱える教員が集まって各自の悩みを共有した上で、今一度、他にできることはないのかを確認し、参加者同士で一緒に解決策を考えるために開催しました。

授業に関してなかなか解決できない悩みは、他の先生と共有するだけでも救いになり、また新たな取り組みへのヒントを得られることもあります。学生のために少しでも良い授業にしたいと考えている先生方の力になれるよう、このようなワークショップは今後も続けていきたいと思っています。

(山本 堅一)



写真1 参加者からの質問に答える講師の様子



写真2 グループ討論中の様子

TEACHING IN ENGLISH WORKSHOP

Teaching in English workshop was held on 21st of August 2017 in the S5 Lecture Hall of S Lecture Building. 17 faculty members attended the three-hour-long workshop. 13 participants belonged to Hokkaido University and 4 were affiliated with other higher education facilities. Workshop was facilitated by Dr. Michal Mazur, an Academic researcher from Center for Teaching and Learning at Hokkaido University.

The purpose of this workshop was to prepare faculty members for expected increase in the number of classes in English. Teaching multicultural classrooms may be difficult without prior experience, so we confronted teachers with and without experience to share and discuss ideas, best practices, etc. The participants could focus on some points to consider and share their thoughts with the others.

Workshop was divided into two parts. It started with a presentation about teaching in English that focused on fundamental things to be aware of when teaching in English, as well as some methods of speaking and encouraging students to include themselves in class discussion. Participants shared their opinions

in the survey, e.g.: “I was nervous to discuss in English, but it was a good experience”; “Teacher’s English was easy to follow”; “I could exchange opinions and heard various ways to teach in English, so I learned a lot”. (Michal Mazur)

Pic. 1 Introductory lecture to the workshop



Pic. 2 Participants working in groups on assignments

平成29年度第1回TF研修会を開催

8月22日（火）13時から17時までの4時間、高等教育推進機構S講義棟S5講義室などにおいて「平成29年度第1回TF研修会」を開催し、学内12部局の37名、他大学2名の大学院生が受講・修了しました。

4時間に及ぶ研修会のプログラムは、表1にある

とおりTFとして業務を担当するにあたり必要な知識や心構えを持つための講義と、TFとして授業改善に貢献するために授業研究をするという実習から構成されています。実習では、他のTF候補生とともにグループワークを行いました。TFを単にTAの延長と捉えるのではなく、数少ない教育経験を積

む機会と捉え就職活動時にいかすため、授業担当教員や受講生に対してどのようなサポートができるのか、この研修を通じてしっかりと考えることができたと思います。

参加者アンケートでは、「自分のTFへのモチベー

ションが向上したと思う」「実習パートでは、シラバスを改善することを通じて『効果的に教えるにはどうすればよいか』を考えることができました」などという意見が寄せられました。

(山本 堅一)

表1 平成29年度第1回TF研修会のプログラム

12:30	受付開始
13:00	挨拶：高等教育推進機構長（長谷川晃）
13:05	講演：TFとしての心構え・クラスマネジメント・教育倫理綱領の理解 （細川敏幸）
13:45	講演：シラバスの構成・読み方（山田邦雅）
14:15	移動 実習セッション：担当授業の授業研究 担当者 山田邦雅、細川敏幸、山本堅一
14:30	実習セッションについての説明
15:00	Wikiページの作成
16:00	グループ内意見交換
16:30	Wikiの修正
17:00	修了証授与、終了



写真1 長谷川機構長による開会の挨拶

写真2 実習セッションの様子

2017年度IDE大学セミナー開催

今年度の北海道支部のIDEセミナーは「新しい教養教育の展開」をテーマとして、8月28日（月）～29日（火）にホテル札幌ガーデンパレスで開催されました。

この15年の間に、大学審議会、経済産業省、厚生労働省等からの提言において、グローバル人材など高等教育に求められる様々な社会人像が提出され、大学在学中に英語力やコンピテンシー、ジェネリッ

ク・スキル、社会人基礎力などの能力を身につけられるよう、教育改革が求められてきました。この解決のため、教養教育の重要性が再認識され、多くの大学でカリキュラム改革やリベラルアーツ学部の創設が試みられてきています。

今年度のIDEセミナーでは、教養教育を積極的に改革した国内の事例を学ぶとともに道内の動向も紹介し、今後の各大学の活動の参考となるよう、また、

各大学で教養教育をいかに活用するかについて、セミナーから今後の指針を得るよう企画しました。な

お、本セミナーには北海道内外から延べ66名が出席しました。

表1 プログラム

・特別講演1 (1日目)「東京工業大学リベラルアーツ研究教育院の挑戦」			
東京工業大学 リベラルアーツ研究教育院			
	副研究教育院長 教授	室田	真男
・特別講演2 (1日目)「現代教養学部の新展開」			
東京女子大学 現代教養学部長 教授		原田	範行
・シンポジウム (2日目)「北海道における教養教育の展開」			
司会：北海道大学 (高等教育推進機構) 教授		細川	敏幸
シンポジスト			
FUNリテラシー	はこだて未来大学 教授	美馬	義亮
全学農畜産実習を中心とした初年度教育	帯広畜産大学 教授	小池	正徳
東海大学型リベラル・アーツ教育のこれから	東海大学 特任助教	植田	俊
国立大学教養教育コンソーシアム北海道の活動	北海道大学 教授	小林	幸徳

と「多様な教養科目」からなります。コア科目は、必修科目として学士課程入学直後の「東工大立志プロジェクト」、3年時の「教養卒論」、選択必修科目として大学院修士課程の「リーダーシップ道場」「ピアレビュー実践」「リーダーシップアドバンス」、博士課程の「学生プロデュース科目」「教養先端科目」が導入されました。1年次の必修科目「東工大立志プロジェクト」では、大講義室（講堂）での講義と少人数クラス（30人）を組み合わせた授業形態を実施しています。少人数クラスでは、「えんたくん」という呼ばれる対話促進ツールを導入し、固定機の教室でもグループでの対話が円滑に行えるような工夫をしています。

写真1 名和総長の挨拶

特別講演

1日目の特別講演は、まず工学系の単科大学で教養教育を積極的に展開しようとしている東京工業大学の室田先生にお願いしました。次に要約します。東京工業大学は、2016年4月からリベラルアーツ研究教育院（以下ILA）と6学院（理学院，工学院，物質理工学院，情報理工学院，生命理工学院，環境・社会理工学院）による新しい教育システムを導入しました。教養教育を博士課程まで必修化し，学院が提供する専門知識と教育院が提供する教養により「志」ある東工大生の育成を目指しています。ILAは56名の教員（教授24名，准教授24名，助教等8名）で構成されています。教養教育は「コア学修科目」

写真2 室田先生講演

また、学士課程と修士課程学生の縦のつながりによる「学びのコミュニティ」を実現するために、修士課程のコア科目群で、大学院生アシスタント (Graduate Student Assistant, GSA) を育成し、学士課程教育にファシリテータやピアレビューアーとして主体的・積極的に携わらせます。「リーダーシップ道場」をGSAの基礎科目とし、「ピアレビュー実践」で「教養卒論」のピアレビューを行います。また、「リーダーシップアドバンス」では「東工大立志プロジェクト」へファシリテータとして参加します。

「教養先端科目」は、最先端の研究の「種」や高度な教養的知識を、グループによる研究や発表を通じて共有します。「学生プロデュース科目」は、学会の大会運営者のように、テーマの選定、会場の手配、グループ編成、プログラム等の検討、準備を進め、「大会」当日の運営を担当します。

次の特別講演は、東京女子大学において現代教養学部を設置している原田先生です。要約すると、東京女子大学は、創立100年を迎える来年4月に、現在の1大学1学部4学科12専攻の体制を、1大学1学部5学科12専攻に改め、リベラルアーツ教育の新たな展開と拡充を進める予定です。同大学は、現代教養学部という1学部が、国際英語学科(国際英語)、人文学科(哲学、日本文学、歴史文化)、国際社会学科(国際関係、経済学、社会学、コミュニティ構想)、心理・コミュニケーション学科(心理、コミュニケーション)、数理科学科(数学、情報理学)で構成されます。全学共通カリキュラムは拡充され、「挑戦する知性」科目を増設(体験型、実践型)、英語教育、情報処理教育など、文理融合の学びを促

進します。これと学科専攻教育の組み合わせで、「国際性や女性の視点」、「実践的な学び」を導入します。

同大学では1専攻型の利点を生かし、学科横断型全学共通カリキュラムを拡充し、全学的キャリア教育を導入しています。全学共通カリキュラムは、①リベラルスタディーズ(24単位)として、「女性の生きる力」など総合教養科目、挑戦する知性科目、キリスト教学科目、②アカデミックスキル(17単位)第一外国語、第二外国語、日本語、情報処理、③自由選択(25単位)に拡充します。専門性を持った学びと、専門を横断する学びの双方を、学部教育の重要な二本柱と位置づけており、全学共通カリキュラムと学科・専攻科目の比は概ね1:1です。

また、学修成果を自他ともに把握して、新しい学びへつなげるために、リベラルアーツ教育のアセスメントモデル構築による学修成果の向上と可視化を行っています。評価のために、直接的指標と間接的指標(自己報告、外部評価)を多数採用し、実施しています。

その他、全学的な英語教育強化をはかるために、①第一外国語科目の拡充(科目の多様性、自習プログラム、クラス分けの精度向上、ライティング)②入試制度改革(「英語外部検定試験利用型」一般入試)③キャリアイングリッシュ課程(キャリアイングリッシュ・アイランド)を計画しています。

シンポジウム

翌日のシンポジウムでは、まず講演者が各大学の活動を発表しました。公立はこだて未来大学の美馬先生は、次のように話されました。公立はこだて未来大学の教育には、基礎的な能力の養成を目指したリテラシー科目群があり、公立はこだて未来大学の略称であるFUNにちなんで、FUNリテラシー

写真3 原田先生講演



写真4 シンポジウムの様子

(FUN Literacy)と呼んでいます。これらの科目は専門分野を学ぶ上で必要となる「読み書きそろばん」にあたる基礎技能に対応し、5つに分けられます。第1と第2は、自分が他者の思考を十分に理解するため、また自分の思考を正確に伝達するための「日本語と英語によるコミュニケーション」の技能です。第3は、コンピュータの動作を記述するために必要な言語を用いる「プログラミング」の技能。第4の技能は「数学」です。第5の技能は「デザイン」です。デザインとは、「より良い形状のものを提案すること」だけではなく、何が良いのかという価値基準を見出し、最も良いものを提案し受け入れてもらうという、問題発見から解決案の提示にいたる、より大きな体系的なプロセスを意味します。同大学ではこのような科目群で身につけたりテラシー能力を用いて、プロジェクト学習、卒業研究に発展させています。

続いて帯広畜産大学の小池先生は、全学農畜産実習を中心とした初年度教育について以下のように説明されました。帯広畜産大学では、農畜産への興味が薄い学生や学力水準の多様化に対応するため、1年次前期の必修科目として「全学農畜産実習」(共同獣医学課程では「農畜産演習」)を開講しています。この科目は、実際に「作物栽培」「乳肉食品生産」「家畜管理」を通して「生命を育み、生命を食す」ことの大切さ、難しさなどを体験してもらうことで、農畜産への幅広い興味や問題意識を育てることを目的としています。また、「Farm to Table」に対応した広い視野の知識を提供するため、全学農畜産実習と連動した座学で1年次前期に「農畜産科学概論」を必修科目として開設し、これらの科目と「語学科目」、「体育実習」のポータルサイトによる出席チェック等を含めた指導をクラス担任(共同獣医1クラス40名、畜産科学課程1クラス約40数名×5:各クラス3名の担任教員を配置)と教育支援室で実施しています。実習担当者やクラス担任の負担は増えたものの、命と向き合う畜産の意義を身をもって学修するなど大きな教育効果を得ています。

次に、東海大学の植田先生が次のように話されました。同大学は建学以来、学びを通じて得た知識や技術を社会のために主体的に、有効に活用できる力

を「教養」と捉え、その育成と浸透に注力してきました。独自に目標設定し取り組んできた4つの力(自ら考える力、集い力、挑み力、成し遂げ力)を持つ人材の育成に加え、地域の「個性」(人間、社会、歴史、自然)に共振し、地域固有の社会的課題の解決に主体的に取り組むことのできる人材育成を目指して、2018年度より「パブリック・アチーブメント(PA)型教育」と呼ばれる新カリキュラムを導入します。PAとは、1990年代初頭からアメリカで実践され始めた若者の社会参画を企図した「市民性教育」の一手法です。PA型教育は「基礎教養科目」「発展教養科目」の二つから成り、従来からの文理融合科目に加え、「シティズンシップ」「ボランティア」「地域理解」「国際理解」という4つの科目を新設します。また、既存の講義にプロジェクト・ベースド・ラーニング(PBL)、アクティブ・ラーニング(AL)などの手法を積極的に取り入れ、学生個々の問題関心に寄り添いながら地域の人々と協働して、固有の課題解決に取り組む経験を積み重ねる機会を増やすことをねらいとしています。

北海道大学の小林先生は国立大学教養教育コンソーシアム北海道(以下「コンソ」という。)について説明されました。コンソは北海道内の国立大学7校が協力して、各大学の教養教育を充実させることを目的に結成されました。これに併せて単位互換協定が7大学間で締結され、各大学で実施される教養教育に関する授業科目を他の大学に在籍する学生が受講できるとともに、それらの授業科目を自大学の単位として認定できます。

2014年度に少数の科目で試行を行った後、2015年度からは本格実施として毎年100科目以上が開講され、配信される科目数や履修者数は年々増加しており、これまでに延べ1100名の学生が履修しました。今年度前期は、遠隔授業56科目、対面授業8科目が開講され、履修申請期間を経て、配信されることとなった科目は35科目となり、履修者は延べ435名、特別聴講学生は301名に達しました。学生からは、他大学が提供する関心のある科目を履修できること、他大学の学生と共に学ぶことに高い評価を受けています。

(細川 敏幸)

北海道FD・SDフォーラム2017を開催

平成29年9月1日（金）13時より、高等教育推進機構において北海道FD・SDフォーラム2017を開催し、全国の大学から多数ご参加いただきました。

北海道ではこれまで、北海道地区FD・SD推進協議会が年一回の総会と総会特別企画を開催し、北海道内高等教育機関の教職員が情報共有や議論する場を設けてきました。今年度からは高等教育研修センターと共催し、毎年9月第一週に北海道FD・SDフォーラムという名称で、北海道内外からも参加者を募って開催することとしました。

表1のプログラムにあるように、桜美林大学篠田道夫教授の基調講演「マネジメント改革，3P・教育の質向上，SDの義務化を考える」に続き、道内3大学から教職協働の取り組み事例を紹介していた

だき、参加者全員で教職協働を進めるための課題等について議論しました。その後は全国の各大学あるいは教職員個々人が研究，実践されているFD・SDに関する発表を3会場に分けて行いました。

初の試みで発表者・参加者が集まるのか不安もありましたが、たくさんの方にご参加いただき、また12題の個人発表はどの会場も盛り上がりました。このように国公私さまざまな大学の教員と職員が集い、これからの大学について情報共有や意見交換をする機会というのは、とても貴重で重要ではないでしょうか。北海道FD・SDフォーラムがそういった機会として認識されるようこれからも続けていきたいと思います。

（山本 堅一）

表1 プログラム

12:15	受付開始	
13:00	開会・挨拶	
13:05	基調講演「マネジメント改革，3P・教育の質向上，SDの義務化を考える」 桜美林大学 篠田 道夫 氏	
13:45	公開討論「教職協働の取り組み強化のために」	
13:45	報告1 小樽商科大学社会情報学科 深田 秀実 氏	
14:00	報告2 北海道科学大学人事課 北條 誠 氏	
14:15	報告3 北海道医療大学学務部 笠原 晴生 氏	
14:30	全体討論	
15:00	休憩	
15:15	個人発表 - 第1部 -	
	〈S3講義室〉	〈S5講義室〉
15:15 ～ 15:35	旭川工業高等専門学校 中村基訓 「教育スキルアーカイブを利用した新任教員研修の実践」	株式会社アルク大学営業チーム 丸山隼人 「高等教育機関におけるFD・SDの事例とプログラムの紹介」
15:40 ～ 16:00	北海道大学高等教育推進機構 山田邦雅 「今日の嘘はどこでしたか？～授業の中の嘘は是か非か～」	北海道教育大学函館校教育学部 山口好和 「教育大学における教育方法の改善とFDプログラム」
16:05 ～ 16:25	創価大学総合学習支援オフィス 池ヶ谷浩二郎 「教職協働に『学』を加えて～SPACEの実践より～」	長崎大学大学教育イノベーションセンター 北村 史 「長崎大学におけるFD・SDの実施形態別の特徴分析と効果的实施体制の検討」
16:25	休憩	

16:35 個人発表 - 第2部 -		〈S3 講義室〉	〈S5 講義室〉
16:35 ～ 16:55	北海道大学国際企画課 山内務巨・熊木弥広・渥美裕介・出口寿久 「『北海道大学ユニバーシティ・アドミニストレーター育成講座』を受講して」		帯広畜産大学 齊藤 準 「物理学の大人数講義型授業におけるアクティブラーニングとその評価・検証」
17:00 ～ 17:20	北海道科学大学教務第一課 石黒祐介 「大学間職員短期派遣研修について」		札幌学院大学経営学部 石川千温 「学生の主体性を育むフィールドワーク型アクティブラーニングの実践 ―江別工業団地広報プロジェクトの例―」
17:25 ～ 17:45	北海道大学学務部学務企画課 石水 健 「北海道大学学務部における教学IR勉強会について」		旭川大学保健福祉学部 大野剛志・中川初恵・信木晴雄・羽原美奈子 「旭川大学における地域実践型アクティブ・ラーニングの現段階と更なる教育の質の保証のために」
18:00	情報交換会 (北部食堂)		



写真1 篠田教授による講演の様子



写真2 個人発表の様子

シンポジウム

「アクティブラーニングは日本の教育を変えるのか」を開催

平成29年9月2日(土)13時より、高等教育推進機構大講堂においてシンポジウム「アクティブラーニングは日本の教育を変えるのか」を開催し、全国の高校や大学から多数ご参加いただきました。

次期学習指導要領の改訂により、今後は大学のみならず小中高校でもアクティブラーニング型授業が普及していくことになります。ただ、アクティブラーニングは言葉こそ浸透していますが、どのような授業をすれば良いのかについては共通認識ができているとはいえ、ネガティブに捉えている教員も少なくありません。

そこで、本シンポジウムでは、高校から2名、大学から3名の方に自身の授業におけるアクティブラーニングの取り組みについて報告いただきました。いずれの先生も何か特別なアクティビティを授業に取り入れているわけではなく、いつもの授業で

アクティブラーニングを意識して取り組まれている事例でした。

事例報告の後は、アクティブラーニングに関するポイント解説を北海道大学の学生5名とのやり取りを交えながら行いました。全体討論では参加者からたくさんの質問をいただき、限られた時間ではあったものの、有益な議論ができたと思います。

事後アンケートでは「授業の方法が先生によってちがう、色々な方法が聞けてとても参考になりました。学生の生の声、とても良かったので今後も聞きたいと思います」、「ALについて知っていたこと、知らなかったことが整理できました」「アクティブラーニングが突如として導入された文脈を理解することができました」などさまざまな意見が出されました。

(山本 堅一)

表1 プログラム

13:00	開会の挨拶 北海道大学高等教育推進機構長・高等教育研修センター長 長谷川 晃
13:10	基調講演「学習指導要領改訂のねらいとその実施に向けて」 文部科学省大学振興課 課長補佐 林 剛史 氏
13:40	話題提供（前半） ①「高校物理におけるアクティブラーニングの試みと成果」 札幌北高校 教諭 中道 洋友 氏 ②「社会科におけるアクティブラーニングの試みと成果」 立命館慶祥高校 教諭 西島 卓 氏
14:20	休 憩
14:30	話題提供（後半） ③「経営学専門科目における取り組み」 北海道科学大学未来デザイン部 准教授 坂井 俊文 氏 ④「国家試験のある歯学専門科目における取り組み」 北海道大学歯学研究院 教授 八若 保孝 氏 ⑤「大学院特別教育プログラム新渡戸スクールにおけるアクティブラーニングの試みと成果」 北海道大学高等教育推進機構 特任准教授 辻 輝之 氏
15:30	休 憩
15:40	アクティブラーニングに関するポイント解説 北海道大学高等教育推進機構 特任准教授 山本 堅一
16:00	全体討論
16:50	閉会の挨拶 北海道大学高等教育推進機構 教授 細川 敏幸
17:00	閉会



写真1 文部科学省林様による基調講演の様子

写真2 全体討論の様子

PFF WORKSHOP 2017

The 8th Preparing Future Faculty (PFF) Workshop was held on September 4-11, 2017, at Multimedia Education Building and S Lecture Building. PFF Workshop was conducted by two invited lecturers from University of California, Berkeley (UCB) Prof. Linda Von Hoene and Dir. Sabrina Soracco.

The workshop was held to contribute to the internationalization of education at Hokkaido University. The purpose of PFF program was to offer the guidance on teaching and writing to graduate students, TA (Teaching Assistants) and professionals who would like to become university teachers or work as a researcher.

This year, 35 international and Japanese students participated in a 5-day-long workshop. They were supported by 5 tutors, the previous PFF Workshop participants. Two lecturers shared their duties and Professor Von Hoene lectured about the teaching and communication skills, while Director Soracco focused on students' writing skills.

The participants were diligently participating in classes and everyone met requirements to pass the workshop. During final presentations students shared their

academic research ideas with the group. The workshop concluded with ceremony where the participants received their diplomas.

(Michal Mazur)

Pic.1 Participants listen to comments and advices from Professor Hoene



Pic.2 Participants and staff gathered for the final picture

Workshop on Creating Rubrics

On September 8 (Friday) a two hours-long Workshop on Creating Rubrics was held at the Multi-purpose classroom 2 at Hokkaido University Multimedia Education Building (4th floor). A 180 minutes long workshop was conducted by

Professor Linda Von Hoene, an invited lecturer from the University of California, Berkeley, USA. This time, seven people from five Hokkaido University departments participated in this event.

This workshop started with an explanation of basic knowledge about rubric evaluation, for example the basic steps of how to make each rubric by dividing it into two types (holistic and analytic), preparation procedure, choosing the scale, etc. After that, the participants read a short report and had to evaluate it with a given rubric. By focusing on Rubric's criteria and discussing with each other about the assessment criteria, the participants were able to think about how to create a better rubric. After that, everyone created a rubric for use in their own classes. With a help of Professor Von Hoene, participants could exchange their opinions and brush-up their rubrics to receive better results through mutual collaboration.

The workshop was well received and participants expressed good opinions about its contents and a way of conducting the event. Among given comments, some participants said that "With hand-on activities and group discussion, this workshop is great for creating rubrics". Others also mentioned that "It was easy to

understand and very good."

(Michal MAZUR)

Pic. 1 Beginning of the Workshop



Pic. 2 Participants discussing the rubrics criteria

第33回北海道大学教育ワークショップを開催

本学では毎年、着任後5年以内の教員を対象とした宿泊型の新任教員研修を実施しており、今年度2回目となる同研修を9月14日（木）から15日（金）の2日間、高等教育推進機構S講義棟S5講義室を会場に開催しました。学内13部局から16名、4他大学から5名の参加者が5つのグループに分かれ、表1のプログラムに沿って担当科目のシラバスをブラッシュアップしました。本ワークショップは年3回開催のうち2回は北広島のホテルでの宿泊型研修ですが、9月は学内開催とすることで、小さな子供



写真1 各自のシラバスをブラッシュアップする様子

を抱えているなど宿泊が難しい教員にも配慮しています。

今年度からプログラムを変更し、グループで一つのシラバスを作成するのではなく個々人のシラバスをブラッシュアップすることを主目的として表1のプログラムにしたがって研修が進められました。2日目はブラッシュアップしたシラバスを基に、初回授業のオリエンテーションを想定した15分間の模擬授業を行い、参加者同士がグループワークを用いた評価とコメントをフィードバックしました。終了後には自分の模擬授業の映像が送られてくるので、他の参加者からの評価と合わせて自らのプレゼンスタイルを確認することができます。

参加者アンケートによると「授業の動機付けについて今回のワークショップで見直すことができたのが大きかったです」「架空ではなく自分のシラバスを対象にできて良かった。すぐ使

えるから発表にあたりいろいろな分野の話がきけてとても面白く、改めて大学って楽しい所だと思いました」などという意見がありました。

(山本 堅一)



写真2 模擬授業を行う様子

表1 第33回北海道大学教育ワークショッププログラム

2017年9月14日(木)	2017年9月15日(金)
8:30 受付開始 北海道大学高等教育推進機構 S講義棟S5講義室	8:40 各自最終確認
8:45 開会・挨拶	8:50 模擬授業①
9:00 オリエンテーション(自己紹介、アクティブラーニング型授業の解説など)	10:20 休憩
10:00 休憩	10:35 模擬授業②
10:10 レクチャー①「授業の目的・目標の設定」 (担当:山本堅一)	12:20 講評
10:40 ブラッシュアップ①「授業の目的・目標」	12:35 修了証書授与式
11:00 グループ共有①「授業の目的・目標」	12:45 閉会
11:20 全体共有①	
11:30 昼食休憩	
12:30 レクチャー②「評価方法の設定」(担当:細川敏幸)	
13:00 ブラッシュアップ②「成績評価」	
13:20 グループ共有②「成績評価」	
13:40 全体共有②	
13:50 休憩	
14:10 レクチャー③「授業計画の設定」(担当:山田邦雅)	
14:40 ブラッシュアップ③「授業計画」	
15:10 グループ共有③「授業計画」	
15:40 全体共有③	
16:00 休憩	
16:10 まとめとふり返し	
17:00 1日目終了	

アクティブラーニング導入ワークショップを開催

9月20日（水）13時30分から180分間、情報教育館4階共用多目的教室2において、山本がファシリテーターとなりワークショップ「アクティブラーニング導入ワークショップ」を開催し、8大学から14名の教職員にご参加いただきました。

本ワークショップは、アクティブラーニング型授業を実践するために必要な知識・心構え等に関する講義の後、参加者が自らの授業をふり返って、アクティブラーニング型授業に必要な課題を検討するという演習で構成しました。参加者は、学習者目線での授業分析と教員目線からの課題分析についてそれぞれワークシートを使って行い、グループ内での討論によって互いにフィードバックすることで更に分析を深めていくことができたようです。アクティブラーニングは他人から与えられる正解というものはありません。真のアクティブラーニングを行うため、授業担当者が自ら考えていただくことで、実り多い研修になったと思います。

参加者のアンケートからは「自ら問題点をあぶり出し、グループで話し合うスタイルは大変面白く、ためになった。自分の授業にも生かせるかもしれない。」「全体的にわかりやすく、目からウロコの事象が多かったです」などという声がありました。（山本 堅一）



写真1 個人でワークシートに記入する様子



写真2 ワークシートを用いてグループ内で議論する様子

ループリック評価入門ワークショップを開催

9月22日（金）13時30分から150分間、情報教育館4階共用多目的教室2において、山本がファシリテーターとしてワークショップ「ループリック評価入門」を開催し、11大学から26名の教員、大学院生にご参加いただきました。

本ワークショップは、授業において学生の様々なパフォーマンスを評価し即座にフィードバックすることで学習の指針や動機付けとさせることができると注目を集めているループリック評価を導入するこ

とを目的に、学習評価の基本を学び自らの授業で使えるループリックの作成について体験していただくため開催しました。講義の後、参加者は実際に自身の授業で使用するループリックを作成し、他の参加者と互いに作成したものを共有して、今後の本格的な作成のきっかけとすることができたと思います。授業期間中は120分で実施している本ワークショップですが、夏季休暇中のため30分長く取りました。

参加者のアンケートからは「現在使用している

ループリックの疑問が解決できました「各々のループリック作業の目的が違ってくるのでグループでの

シェアは大切な時間となった」などという声がありました。
(山本 堅一)



写真1 学習評価の基本に関する講義の様子



写真2 作成したループリックを他の参加者と共有する様子

講演会「伝わる話し方を心がけて」を開催

10月23日(月)15時30分から90分間、情報教育館3階スタジオ型中講義室において、日本航空株式会社の小森裕子様を講師にお招きした講演会「伝わる話し方を心がけて」を開催し、9大学から67名の教職員にご参加いただきました。

飛行機の客室乗務員と大学の教職員で業種は異なりますが、どちらも話すことの専門家ではない、という点は同じです。大学は教員、職員そして学生という異なる立場の人々が日々コミュニケーションを取るところです。このような講演依頼は初めてのことでしたが、飛行機内という空の上の狭い空間で乗客に的確なアナウンスやサービスを行う客室乗務員から、私たち大学関係者も学ぶことはあるだろうと考え、講演会を開催しました。

伝わる話し方に関するもののみならず、JALフィロソフィーを社員全員で共有することを大切に、社員のベクトルを合わせて仕事をされていることなどもとても参考になりました。参加者のアンケートからも「自分が発した言葉が自分に返ってくるという内容が、考えられるものであり、今後の改善点にしようと考えた」「お話がわかりやすく、



写真1 講演の様子

写真2 参加者に意見を聞く講師の小森様

とても時間が短く感じました。仕事だけでなく、今後の自分の人生に役立つ講演でした」などという声

がありました。

(山本 堅一)

教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

大学IRコンソーシアムワークショップ，セミナー開催

本学が運営会員校として参加している大学IRコンソーシアムは、共通学生調査とデータベースを提供し、参加大学の教学IRの一助となる活動を推進しています。会員校は着実に増加し、2017年8月1日現在で53校に達しています。コンソーシアムでは、会員校向けに学生調査結果を利用した教学IRの実践事例の共有を主な目的として、毎年ワークショップを開催しています。また、非会員校向けには、コンソーシアムの活動の周知とIR活動に関する大学間交流を目的にセミナーを開催しています。この度、ワークショップとセミナーが、9月8日（金）に東京の甲南大学ネットワークキャンパス東京で開催され、主催者側として出席してきました。

午前中に開かれた会員校向けワークショップは、32名の参加があり、4つの大学の事例が紹介されました。講演のタイトルは、「学生調査とグローバル人材育成」（琉球大学・石川隆士氏）、「学生調査回答と教務・学生支援データを活用した分析」（玉川大学・栗原郁太氏）、「BI（Business Intelligence）ツールとデータマイニング手法を使った学生アンケートの分析について」（上智学院・鎌田浩史氏）、「東京薬科大学における大学IRコンソーシアム学生調査の活用について」（東京薬科大学・岩清水貴嗣氏）です。タイトルのみからも、各大学が学生調査結果を利用して多様な教学IR活動を展開していることが理解できます。琉球大学は英語教育カリキュラムの改革を行い、玉川大学は調査結果を学生支援に活用し、上智学院はBIツールを用いた結果の可視化と各設問間の関係の詳細分析を行い、東京薬科大学は社会で活躍する卒業生がどのような学習

経験を経たのか、学生生活をどのように感じているのかを分析し、エビデンスベースで大学改革を論じようとしています。講演終了後は昼食をとりながら参加者が議論をする時間が設けられました。教員、職員を問わず教学IR担当者が集うことにより、研究発表が主である学会などでは実現することができない大学教職員が一同に議論をする貴重な機会となりました。

午後は、非会員校向けのセミナーが開催され、36名の参加がありました。共通学生調査の活用事例として、午前中の会員向けワークショップと同内容で琉球大学と玉川大学の事例が報告されました。さらに、コンソーシアムで運用するIRシステムと入会に関する説明へと続きました。アンケート結果からは、コンソーシアムへの参加を検討する大学が複数あることも明らかになり、会員校のさらなる増加が期待されます。

ワークショップ、セミナーには、全国の大学から参加があり、質問や意見交換の内容からは、多くの大学が試行錯誤をしている様子もうかがうことができました。今回特に、BIツールに関する講習の要望、卒業生調査実施の要望、学生への調査結果のフィードバック方法に関する情報が欲しいという意見が複数聞かれました。卒業生調査については、今後コンソーシアムで共通調査を扱う準備を進めており、来年度には複数の大学が参加する調査を実施したいと考えています。主催者側としては、多くの情報交換の場を設け、各大学の優れた実践例を共有する重要性をあらためて感じました。

(宮本 淳)

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

北海道大学の入試改革に向けて

高等学校教育改革，大学教育改革，大学入学者選抜改革を一体的に進めることを記した，文部科学省高大接続システム会議の最終報告は，現在各大学が進めている新しい入学者選抜に大きな影響を及ぼしています。特に大学入学者選抜は，高等学校と大学の接点として，両者の改革を牽引する重要な機能として位置づけられました。その中で，次世代を担う高校生が培うべき「学力の3要素」(①知識・技能の確実な習得②(①を元にした)思考力・判断力・表現力③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度)をいかに多面的・総合的に評価するか，その観点の転換が強く求められています。

この改革と連動する形で，来年3月に公示される学習指導要領の改定も進められています。今回の改定は，従来の作成方針とは大きく異なります。まず2014年11月に，中央教育審議会に文部科学大臣から「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」という諮問が行われ，国語や数学など各教科の部会が発足する前に，教育課程企画特別部会が10ヶ月先行して組織されました。そこでは2030年時において，生徒がどのような「資質や能力」を具備すべきかといった具体的な「資質・能力」に関す

る議論が行われました。それを受けて今回の学習指導要領の改定は進められています。

世界の初等中等教育改革は急テンポで進んでいます。例えば，1997年から2003年にかけて活動したOECD DeSeCoプロジェクトのキー・コンピテンシー(邦題：国際標準の学力を目指して)の成果は，世界各国に飛び火したことは広く知られています。フィンランドを始め世界の教育を牽引する各国では，生徒に育成すべき「資質・能力」をあらかじめ明確にした上で，それを基盤にカリキュラムや学習内容を編成し，入学者選抜で評価しています。この流れは，日本の次期学習指導要領にも大きな影響を及ぼしてきています。

本機構の高等教育研究部門には，入試に関する国の委託研究や「コンピテンシー」に関する研究，また本学の新しい入試を研究しているチームがあります。今，内外の教育課程や入学者選抜がどのような方向に進もうとしているのか，また本学はそれに対してどのような方向に進もうとしているのかについて，最新の動向をこれからリレー形式でお伝えしていくことにします。(鈴木 誠)

地域社会連携 Community Relations

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に出席

9月25日，26日に徳島大学で開かれた第39回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に出席してきました。全国の国立大学で生涯学習や地域連携を担当する約50人の教職員が参加し，野地澄晴学長ら徳島大学の執行部や，文部科学省の萬谷宏之・生涯学習推進課長，山本健慈・国立大学協会専務理事の出席も得て開催されました。

1日目は，今年の主催校である徳島大学の大学開放実践センターの30周年行事を兼ねた公開のフォーラムが開かれました(写真1)。クリエイターや起業家を引きつけるユニークなまちづくりで注目される徳島県神山町の「神山プロジェクト」について，大南信也氏(NPO法人グリーンバレー理事長)が記念講演しました。続いて，「生涯学習系センター

のこれからの役割」と題したパネルディスカッションでは、徳島大学の現役学生が主体となって県南の牟岐町で過疎地の教育支援に取り組むNPO法人ひとつむぎの活動や、大学公開講座の修了生の活動など、徳島大学を中心とした生涯学習、地域連携の取り組みについて報告がありました。今後の課題として、生涯学習系センターが仲立ちする形で、地域における学生の活動を正規の授業に結びつける必要性についても議論されました。

2日目は、大学の生涯学習事業におけるIR (Institutional Research) の可能性をテーマとして議論が行われました。冒頭、出席者への情報提供として、本学の宮本淳・総合IR室特任准教授が「教学IRの進展と大学生涯学習IRへの応用」と題して基調講演しました。宮本特任准教授は、本学での教学IR活動とその成果を紹介した上で、生涯学習分

野へのIRの応用について「大学の生涯教育活動に絞れば、データに基づく取り組みの評価と改善という観点で教学IRと同じ用法が使える可能性がある」と話しました。その後、参加者がグループに分かれて、各大学でのIRの取り組み状況を情報共有し、生涯学習の分野におけるIR活動の可能性や課題について意見交換しました(写真2)。

なお、フォーラムに合わせて開かれた総会では、来年、協議会が40周年を迎えるのを機に40年史を刊行すること、今年度から一部の会員校が参加して始まった社会教育主事の養成と力量形成支援に関する研究を契機として会員校間での共同研究をさらに進めていくことが確認されました。今回、2日目に議論された「大学生涯学習IR」は、新たな共同研究のテーマとして、この先3年度にわたって集中的な協議の対象とされる予定です。(三上 直之)



写真1 公開フォーラムの様子



写真2 「生涯学習IR」についてのグループディスカッション

学生支援 STUDENT SUPPORT

特別講義「大学と社会－先輩からの熱いメッセージ」を開講 －12人の卒業生が後輩に熱弁－

全学教育の特別講義「大学と社会－先輩からの熱いメッセージ」を開講しています。

本講義は、平成10年度より当時の中村睦男総長の発案により学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。社会の第一線で活躍する本学の卒業生が後輩にあたる1年生を主な対象に、学生時代から現在までの体験談を中心にお話をいただき、受講生である学生は、これらの講義を通じて、大学生活のあり方や将来のキャリアについて



写真1 講義の様子

考える能力を育成することを目的としています。

なお、今年度から、新渡戸カレッジと共同で開講することとなり、本授業科目が新渡戸カレッジのポイントとなるとともに、講師12名のうち、8名は新渡戸カレッジのフェローをお願いをしました。

今年度は、1年生を中心に70名の学生が受講していますが、サブタイトルどおり、多くの方々が卒業

生ならではの熱いメッセージを後輩たちに送っていただきました。

毎回30分程度の質疑応答の時間を確保していましたが、時間が足りなくなるほど学生から数多くの質問が出るなど充実した授業内容となりました。

(亀野 淳)



写真2 質問をする学生

写真3 講義をする講師(廣重氏)

表1 2017年度 「大学と社会」スケジュール

【秋ターム】	
① 9月28日(木)	○ ガイダンス (亀野など)
② 10月5日(木)	○ 本授業の意義など、授業の進め方 など
③ 10月12日(木)	○ 伊藤 慎 氏 (大塚製薬株式会社 医薬営業本部 マーケティング部・シニアマネージャー) ◇薬学部卒
④ 10月19日(木)	○ 西坂 博紀 氏 (花王株式会社 人財開発部門キャリア開発部) ◇教育学部卒
⑤ 10月26日(木)	○ 大友 俊彦 氏 (中外製薬㈱・オンコロジーライフサイエンスマネジメント部・グループマネージャー) ◇獣医学部卒
⑥ 11月2日(木)	○ 樋口 真理花 氏 (三菱ケミカル㈱ 四日市事業所 製造2部 技術室) ◇理学部卒
⑦ 11月9日(木)	○ 高木 忍 氏 (ノボザイムズ ジャパン㈱ 研究開発部門 シニアマネージャー イノベーション開発担当) ◇農学部卒
⑧ 11月16日(木)	○ 大塚 裕輝 氏 (北海道ガス株式会社 総務人事部人事グループ 主任) ◇経済学部卒
【冬ターム】	
⑨ 11月30日(木)	○ ガイダンス, 本授業の意義など (亀野など)
⑩ 12月7日(木)	○ 廣重 勝彦 氏 (エルムキャピタルデザイン 代表取締役) ◇法学部卒
⑪ 12月14日(木)	○ 小谷 達雄 氏 (株式会社イセト 代表取締役会長) ◇文学部卒
⑫ 12月21日(木)	○ 山崎 知之 氏 (三菱重工業株式会社 マーケティング&イノベーション本部 先進デザインセンター・上席主任) ◇工学部卒
⑬ 1月11日(木)	○ 上田 英樹 氏 (NTTコミュニケーションズ株式会社 理事 第三営業本部 副本部長) ◇教育学部卒
⑭ 1月18日(木)	○ 常俊 優 氏 (公益財団法人北海道科学技術総合振興センター (ノーステック財団) アドバイザー) ◇経済学部卒
⑮ 1月25日(木)	○ 萱野 聡 氏 (株式会社サクセスボード 代表取締役社長) ◇法学部卒
⑯ 2月1日(木)	○ 最終まとめ

「全学インターンシップ成果発表共有会」開催

去る10月27日（金）に「全学インターンシップ成果発表共有会」が、高等教育推進機構高等教育研究部とキャリアセンターの主催により開催され、学生110名、企業・団体等関係者23名の参加がありました。

この成果発表共有会はインターンシップ終了後の学生に、その成果を振り返り、他の学生とその成果を共有し、今後の学生生活やキャリア形成に役立てるために実施したものです。

まず、今年の夏季休暇中にインターンシップに参加した学生の中から、鈴木理花子さん（文学部3年：インターパーク）と野崎佑斗さん（大学院環境科学院修士1年：サッポロビール）の2名に各10分程度の成果発表をしていただきました。

その後、1グループあたり6～8名程度で16のグループに分かれて「どのようなインターンシップに参加したいか。インターンシップの期間・目的・特に入ってほしいプログラムなど、具体的な要素をプレゼンせよ」というテーマでグループワークを行い

ました。このグループワークでは、自分の参加したインターンシップをもう一度振り返り、その内容をグループ内で共有しながら意見の集約を図りました。その後、隣のグループに対して3分程度の発表を計2回行いました。本来であればすべてのグループに全体発表をしてもらいたかったのですが、16グループと多く時間の関係上このような方法を採用しました。

このグループワークの様子や発表を企業・団体の関係者の皆さんにも自由に見ていただき、「自分の意見をしっかり発言できている」というお褒めの言葉をいただきました。

こうした形式の成果発表共有会は昨年度に引き続き3回目の開催でしたが、参加学生も大幅に増加し、学生、企業関係者とも満足度が高かったことから来年度以降もこのような成果発表共有会を開催していきたいと考えています。

（亀野 淳）

表1 インターンシップ成果発表共有会 プログラム

日 時：平成29年10月27日（金） 18：30～20：30

場 所：工学部オープンホール

1. 開会挨拶 高等教育推進機構 准教授 亀野 淳

2. 内容説明 キャリアセンター インターンシップ・マネージャー 川上 あき

3. 成果発表

① 鈴木理花子（文学部3年）

インターンシップ先：株式会社インターパーク

② 野崎佑斗（大学院環境科学院修士1年）

インターンシップ先：サッポロビール株式会社

4. グループワーク

テーマ：「どのようなインターンシップに参加したいか。インターンシップの期間・目的・特に入ってほしいプログラムなど、具体的な要素をプレゼンせよ」

① グループ内でディスカッション（約40分）

② 隣の班に対してお互いに発表（3分×2）

③ ブラッシュアップ（2分）

④ 別の隣の班に対してお互いに発表（3分×2）

5. 来場企業・団体からのコメント

6. 全体総括・コメント 高等教育推進機構 准教授 亀野 淳

（敬称略）



写真1 成果発表の様子1



写真2 成果発表の様子2



写真3 グループワークをする学生と見守る企業の方々



写真4 グループ発表の様子

経済同友会と連携した長期インターンシッププログラムに参加した学生の成果発表会開催

公益社団法人経済同友会が実施する「望ましいインターンシップの枠組み」(<http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2015/160328a.html>)の趣旨に賛同し、昨年度より本学も参加しています(表1, 2)。

本学からは野村證券3名、三井住友銀行3名、三菱ケミカル、花王、JFEスチール、デュポン、大林組、第一生命、日本板硝子、日本航空各1名の計10社、14名の学生が参加しました。これは、昨年度の計7社、8名を大幅に上回る参加となりました(表3～5)。

そして、その成果発表会を去る11月7日(火)に高等教育推進機構高等教育研究部とキャリアセンターの主催により開催し、同インターンシップに参加した13名の学生の他、学生を受け入れていただいた企業の関係者2名、来年度に参加を希望する学部1年生4名が参加しました。

本成果報告会では、同インターンシップに参加し

た学生が各10分程度、インターンシッププログラムの内容、役立ったこと、今後の学生生活への活かし方などについて成果発表を行い、その発表に対して各5分程度の質疑応答を行いました。

これに先立ち、11月1日(水)に、同インターンシッププログラムの推進に中心的な役割を果たされ



写真1 発表する学生1

ている，経済同友会インターンシップ推進委員長の天羽稔氏（デュポン名誉会長），経済同友会執行役藤巻正志氏が来学され，昨年度及び今年度に同プログラムに参加した9名の学生と懇談を行いました。

また，その後，名和総長を表敬訪問され，インターンシップや大学教育について懇談を行いました。

（亀野 淳）



写真2 発表する学生2



写真3 企業担当者からのコメント1



写真4 企業担当者からのコメント2



写真5 発表学生集合写真

表1 経済同友会と連携したインターンシップに参画している大学等

	大学等の名称	数
国立大学	北海道大学・小樽商科大学・お茶の水女子大学・東京外国語大学・新潟大学・九州大学	6
公立大学	山陽小野田市立山口東京理科大学・高知工科大学	2
私立大学	上智大学・昭和女子大学・津田塾大学	3
高 専	仙台高専・富山高専	2

表2 同事業に参画している企業

	企 業 名	数
本学の学生派遣企業	デュポン，出光興産，花王，三菱ケミカル，野村證券，富士ゼロックス，日本航空，JFEスチール，三井住友銀行，第一生命保険会社，日本板硝子，大林組	12
本学からの派遣がない企業	凸版印刷，キッコーマン，キッツ，個別指導塾スタンダード，シーエーシー，ニフコ，パソナグループ，マニライフ生命，全日本空輸，住友林業，日本信号	11

表3 本学学生の参加状況

	文 系			理 系			計		
	2016 年度	2017 年度	計	2016 年度	2017 年度	計	2016 年度	2017 年度	計
1 年	1	1	2	1	0	1	2	1	3
2 年	3	5	8	3	8	11	6	13	19
計	4	6	10	4	8	12	8	14	22

表4 本学学生が参加している企業と人数

	文 系			理 系			計		
	2016 年度	2017 年度	計	2016 年度	2017 年度	計	2016 年度	2017 年度	計
野村證券	1	1	2	1	2	3	2	3	5
三井住友銀行	1	2	3		1	1	1	3	4
富士ゼロックス	1		1				1		1
三菱ケミカル				1	1	2	1	1	2
出光興産				1		1	1		1
花王	1	1	2				1	1	2
JFEスチール				1	1	2	1	1	2
日本航空		1	1					1	1
第一生命		1	1					1	1
デュボン					1	1		1	1
大林組					1	1		1	1
日本板硝子					1	1		1	1
計	4	6	10	4	8	12	8	14	22

表5 経済同友会と連携したインターンシッププログラム スケジュール (2017年度)

時 期	内 容
5月8日(月), 10日(水)	学生に対する説明会実施
5月15日(月)～18日(木)	参加希望学生の募集
5月22日(月), 23日(火)	参加申込学生に対する選考(書類及び面接)
5月24日(水)	学生へ選考結果通知
7月4日(火)または5日(水)	事前研修①
7月11日(火)または12日(水)	事前研修②
7月下旬～8月上旬	個人面談(1人10分程度)
7月下旬	自己分析の実施
インターンシップ終了後2週間以内	成果レポートの提出
インターンシップ終了後1ヶ月程度	アンケートの提出
10月27日(金)	成果発表共有会(全体)の開催
11月7日(火)	経済同友会版インターンシップ成果報告会の開催
12月～1月	成績評価

科学技術コミュニケーション オープンエデュケーションセンター CoSTEP部門

札幌クリエイティブコンベンション“NoMaps”に、子ども向けサイエンスワークショップ「没入！バーチャル支笏湖ワールド」を出展

2017年10月15日（日）、CoSTEP第13期メディアデザイン実習（指導教員：村井 貴 特任助教／早岡 英介 特任准教授）の受講生7名（櫻井弘道さん・岡 碧幸さん・前田裕斗さん・長谷川 俊さん・植村 茉莉恵さん・何 玉瑩さん・上川 伶さん）が企画した、子ども向けサイエンスワークショップ「没入！バーチャル支笏湖ワールド」(以下、支笏湖ワールド)を札幌市青少年科学館にて開催しました。



写真1 VRコンテンツで支笏湖の世界に没入する様子



写真2 支笏湖ワールドの会場

本ワークショップは札幌クリエイティブコンベンション“NoMaps”の「没入祭 VR FESTIVAL SAPPORO 2017」の取り組みのひとつです。NoMapsはアメリカ合衆国テキサス州オースティンで毎年3月に開催されるサウス・バイ・サウスウエストをモ

デルにした大規模なイベントで、2017年度のテーマに「まちに、未来を、インストール」を掲げ、映画・音楽・インタラクティブの三分野とその複合領域において様々なイベントを実施し、北海道全体の産業や学術、文化を活気づけるコンベンションです。運営はNoMaps実行委員会によって行われており、委員長に初音ミクの開発で有名なクリプトン・フューチャー・メディア株式会社代表取締役の伊藤博之氏、名誉委員長に秋元克広札幌市長、顧問に高橋はるみ北海道知事、名和豊春北海道大学総長、委員に山本 強先生（北海道大学大学院 情報科学研究科 特任教授）が就任されています。

NoMapsの没入祭は三分野の内のインタラクティブに該当し、バーチャル・リアリティ（以下、VR）による体感型のデジタルコンテンツに文字通り“没入”する祭典で、支笏湖ワールドの他、「初音ミクVR音楽ゲーム」や「VRドームムービーセレクション&木箱プラネタリウムライブ」などが企画されました。

本稿ではCoSTEP第13期メディアデザイン実習による支笏湖ワールドの制作プロセスとワークショップ開催当日の活動報告等について報告します。

【NoMaps出展の経緯】

最先端のデジタル表現を駆使しながら、地域に根ざした取り組みを続けるクリプトン・フューチャー・メディア株式会社（以下、クリプトン）のスタッフにお話をうかがい、新しい科学技術コミュニケーションを考える機会にしようと、2017年2月15日（水）に、CoSTEP第12期Webデザイン実習（指導教員：村井 貴 特任助教／池田貴子 博士研究員）による課外特別演習「クリプトン・フューチャー・メディアに行こう！」を実施しました。それをきっかけに何度かやりとりを重ねる中で、NoMaps実行委員会の伊藤博之委員長より2017年10月に開催予定の没入祭への出展を打診され、慎重に検討を重ねた

結果、CoSTEP第13期メディアデザイン実習の成果発表の場として出展することになりました。

写真3 課外特別演習「クリプトン・フューチャー・メディアに行こう!」にて、NoMaps実行委員長の伊藤博之氏と。向かって右側が筆者

【企画づくり】

CoSTEPでは実践ベースの科学技術コミュニケーション教育を大切にしています。特に本科の実習は社会に受け入れられるレベルにまで高めた成果物を出すことを目標に日々活動しています。毎週土曜日の午前中に行われる実習の時間は、教員が一方的に教える形式ではなく、受講生が主体となってディスカッションし、試行錯誤しながら進みます。成果物自体も大事ですが、完成にいたるまでの制作プロセスがなにより重要です。時に失敗することもあります。そこからなにを学び、次にどうつなげていけば、よりよい結果につながるのかを受講生に考えてもらうようにしています。

メディアデザイン実習の受講生7名は企画づくりのための議論を重ね、札幌から比較的近い支笏湖の水中環境をVRコンテンツとして撮影し、子ども向けのサイエンスワークショップで披露し、地域の子どもたちに支笏湖の中を疑似体験してもらうことを決定しました。また、本ワークショップのVRコンテンツはVRスコープ「ハコスコ」の推奨年齢（7歳以上）にならっているため、ターゲットとなる子どもの対象年齢の下限を小学校2年生とすることも合わせて決めました。

【支笏湖にダイビング!】

晴天に恵まれた8月28日（月）、メディアデザイン実習一行は支笏湖に赴き、ダイビングインストラ

クターの関 勝幸氏やCoSTEP研修科生の廣島潤子氏の協力を得ながら、VR映像の撮影を敢行しました。受講生はダイビング未経験者がほとんどだったため、関氏や数々の水中映像を撮影してきた早岡先生の指導を受けながら、徐々に潜水技術を身に付け、撮影を進めていきました。機材は、30mまで潜ってVR映像を撮影できるKey Mission360（NIKON製）やフルHDで撮影できるGoProなどを使用しました。

日本一の透明度を誇る支笏湖にはアメマスやスマチチブ、スジエビやウチダザリガニが生息しており、受講生はそれらの生き物を撮影しました。加えて、湖底で腐らずに残っている流木や柱状節理と呼ばれる切り立った崖など支笏湖ならではの映像も収めました。



写真4 湖底の湧き水を撮影する受講生

【VR映像の編集】

支笏湖で撮影した映像をつなぎ合わせて、ひとつのストーリーを作っていくために、受講生はどの映像になにが映っているのかをひとつひとつ確認して、リストアップを進めていきました。撮影した映像が膨大な量であったことと、VR映像は360度の全天球型で記録されているため限なく確認することが困難であったことから、リスト化には多くの時間を割きました。その結果得られた良質な映像を基に編集作業を進めました。

編集はAdobe Premiere Pro CCにて行いました。Premiereには撮って出しの平面で確認できるモードと全天球型で確認できるVRモードがあるため、二つのモードを切り替えながら編集作業を進めました。どうやったら見やすくなるか、どことどこをつなげたら子どもたちの学習効果が高まるか、テロップはどこに挿入したら読みやすくなるか、受講生らは映像を専門とする早岡先生の指導を受けなが

ら、細かい配慮を加えつつ、VRコンテンツを完成させました。

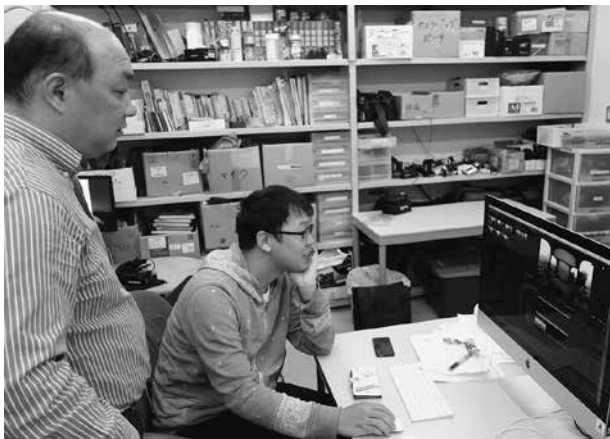


写真5 VR映像の編集作業を行う受講生

【ポスターの制作】

支笏湖ワールドのポスターは岡 碧幸さんが担当しました。VRは最先端の表現手法のため、ハイテク感がどうしても強く出てしまいがちですが、岡さんは色鉛筆を使って、ぬくもりのある世界観をあえて描き出し、子どもたちにとって親しみやすいポスターを完成させました。

メディアデザイン実習ではワンソース・マルチユース（ひとつの素材を多くのシーンで活用すること）の考え方にに基づき、ポスターのメインビジュアルをCoSTEP公式サイトやFacebookページ「CoSTEP_PR」、当日のスライドデザインなどにも使用しました。その結果、企画全体にビジュアル的統一感をもたらすことに成功しました。

写真6 色鉛筆で彩色していく、岡 碧幸さん



写真7 支笏湖ワールドのポスター

【ワークショップのリハーサル】

本番を3日後に控えた10月12日（木）、メディアデザイン実習はリハーサルを行いました。それに先立ち、当日の進行をまとめたマニュアルを制作し、



写真8 リハーサルの様子



写真9 さわれるのではないかと錯覚するくらいの没入感

ワークショップ実施に興味のある他受講生を募りました。リハーサルでは本番さながらに、VRゴーグルを複数台用意し、装着の手順を確認したり、転ばないようにフォローしたり、スクリーンを使って解説したりとひとつひとつの流れを細かくチェックした後、全メンバーでダメ出しをし合い、マニュアルや進行の改善点を洗い出しました。ここから本番までの残された時間を使って、改善点をひとつずつ潰していきました。

【本番当日】

10月15日（日）、会場の札幌市青少年科学館に集まった受講生らは午前中に会場設営と最終リハーサルを行い、13時から本番をスタートさせました。支笏湖ワールドの開催時間は13時から15時までの2時間。30分の入れ替え制で、合計4回入れ替えを行います。1回の受け入れ人数は12名、全体では48名まで受け入れます。

初回はなんと満員御礼！進行役の前田裕斗さんと岡 碧幸さんは元気いっぱいに支笏湖について解説していきます。前田さんはこの日のために、探検隊コスチュームを用意し、支笏湖探検隊長を名乗って、子どもたちを魅惑の支笏湖ワールドに誘っていきます。子どもたちはもちろんのこと、観覧席で見守る家族の方々も、身振り手振りをまじえた前田さんの丁寧な解説に聞き入っているのが印象的でした。

支笏湖の情報をひとしきり伝えた後は“没入タイム”です。子どもたちはVRゴーグルを装着し、支笏湖の水中環境に没入していきます。VRゴーグルをつけて頭を動かすことで、まるで水の中で視点を動かしているような視覚体験ができます。上を見た



写真11 支笏湖探検隊長の話に熱心に聞く、子どもたち



写真12 VRゴーグルを装着させる受講生



写真13 「なにが見えていますか？」と語りかける受講生

ら水面が、下を見たら湖底が見えるといった具合です。見る方向によって見えるものが変わる、それがVRコンテンツです。支笏湖のアメマスやウチダザリガニ、流木や柱状節理が子どもたちの目の前にどんどん迫ってきて、まるでダイビングをしているかのような疑似体験ができるのです。

没入タイムが終わると、次は知識の定着を図るための“シールタイム”に移ります。岡さんによって

写真10 支笏湖の成り立ちを解説する、支笏湖探検隊長の前田裕斗さん

制作された「支笏湖断面図シート」にVRコンテンツで見たものをシールで貼っていきます。シールを全て正しく貼り終えることができれば、魚のペーパークラフトを持ち帰ることができます。本ワークショップに参加した子どもは全部で43名。全員が全問正解で、ペーパークラフトを持ち帰ることができました。



写真14 支笏湖断面図シートにシールを貼っていく様子



写真15 親子で相談しながら貼る姿も見られました

【アンケート結果】

親子連れで来場されることを想定し、本ワークショップのアンケートは親が子どもに尋ねながら回答する形式にしました。質問「おもしろかったイベントのコンテンツはなんですか？」(回答数：37件／複数回答可) に対しては選択肢「VRコンテンツの体験」(34件) が圧倒的で、シール貼り (11件) や他のコンテンツをしのぐ結果となりました。質問「イベントに参加した感想について教えてください」

い。」(回答数：35件／複数回答可) に対しては選択肢「VRの科学イベントにまた参加したい。」(23件) と選択肢「もっとVRを体験してみたいくなった。」(16件) とVRに関する評価を高く得ることができました。また、質問「イベント参加前に比べて、支笏湖に関する理解は深まりましたか？」(回答数：35件) に対しては約97%が「深まった」と考えていることが分かりました。以上の結果を踏まえると、VRを取り入れて支笏湖について学ぶことのできる、本ワークショップは概ね成功したと考えられます。

【まとめ】

なかなか行けない場所、見られないものをVRコンテンツ化して、一般の方々に伝えていくのは新しい科学技術コミュニケーションの形です。今回、CoSTEPメディアデザイン実習では支笏湖の水中環境を子どもたちに伝えるべく、VRを駆使したサイエンスワークショップを企画しました。子どもたち



写真16 メンバー全員で記念撮影



写真17 VRスタイルで記念撮影をもう一枚。まさに支笏湖ワールド！

からは高い評価を得ることができ、この結果はCoSTEPのこれからの教育研究活動につなげられるものと考えます。

なお、10月21日付けの北海道新聞にて、本ワークショップが「仮想現実 新たな可能性」の見出して

記事になったことも合わせて報告します。

(オープンエデュケーションセンター

科学技術コミュニケーション教育研究部門

(CoSTEP) 特任助教 村井 貴)

日誌 EVENTS, August–November

8 月

5 日～8 日 (行事)

オープンキャンパス (札幌キャンパス)

6 日 (行事) 第95回サイエンス・カフェ札幌 (CoSTEP)

7 日 (行事) オープンキャンパス (函館キャンパス)

10 日 (研修) 講演会「Practical use of IR data, and training researchers in charge of IR」(高等教育研修センター)

10 日 (行事) 夏期特別講座「健康リテラシーを高めて健康寿命を伸ばそう！」(NHK×CoSTEP)

10 日～23 日 (会議)

第2回北海道地区FD・SD推進協議会幹事会

18 日 (研修) 授業運営の苦悩～解決策を探る (高等教育研修センター)

19 日 (行事) 北海道大学進学相談会 (東京)

19 日～20 日 (行事)

PICBOOK ～芝生の上でアートを「読もう」～ (CoSTEP)

20 日 (説明会) 主要大学説明会 (名古屋)

21 日 (会議) 第1回大学院共通教育専門委員会

21 日 (研修) Teaching in Englishワークショップ (高等教育研修センター)

22 日 (研修) 第1回北海道大学TF研修会 (高等教育研修センター)

24 日～25 日 (会議)

第67回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会 (東北大学)

24 日～28 日 (会議)

第3回北海道地区FD・SD推進協議会幹事会

25 日 (会議) 第3回教育改革室会議

25 日 (会議) 第2回総合教育教務・学生専門委員会

27 日 (説明会)

主要大学説明会 (札幌)

28 日～29 日 (行事)

平成29年度IDE大学セミナー「新しい教養教育の展開」

31 日 (会議) 第89回教務委員会

31 日 (会議) 第2回高等教育推進機構学務委員会

31 日～9 月 3 日 (行事)

ペルソナワークショップ (韓国芸術総合大学デザイン専攻×大阪工業大学の情報メディア学科×CoSTEP)

9 月

1 日 (会議) 全学教育科目責任者会議

1 日 (会議) 北海道地区FD・SD推進協議会総会

1 日 (行事) 北海道FD・SDフォーラム2017

1 日～8 日 (会議)

第4回教育改革室会議 (持回り)

2 日 (行事) シンポジウム「アクティブラーニングは日本の教育を変えるのか」(高等教育研修センター)

3 日 (説明会) 主要大学説明会 (広島)

8 日 (研修) Workshop on creating rubrics (高等教育研修センター)

8 日～15 日 (会議)

第4回高等教育推進機構運営委員会

(持回り)

10日 (行事) 第96回サイエンス・カフェ札幌
(CoSTEP)

11日 (会議) 第3回NITOBEd教育システム将来構
想諮問委員会

12日 (会議) 第2回クラス担任等連絡会

12日 (行事) 確率カフェ「ありえないはありえな
い～極めて低い確率の哲学」
(CoSTEP)

13日 (会議) 第5回ELMS定例会議

13日～25日 (会議) 第2回オープンエデュケーション専
門委員会 (持回り)

14日～15日 (研修) 第33回北海道大学教育ワークショッ
プ (高等教育研修センター)

20日 (研修) アクティブラーニング導入ワーク
ショップ (高等教育研修センター)

22日 (会議) 第3回新渡戸カレッジ運営会議 教
務専門委員会

22日 (研修) ルーブリック評価入門ワークショッ
プ (高等教育研修センター)

22日・28日 (行事) 公務員の仕事研究ガイダンス

25日 (行事) 学部・学科等移行ガイダンス

26日 (行事) 学部・学科等紹介

26日 (行事) 就職ガイダンス

26日 (会議) 第3回新渡戸カレッジ定例会

27日 (行事) 留学生のための就活オールガイド講
座1

29日 (会議) 第2回新渡戸カレッジ運営会議・第
2回新渡戸スクール運営会議合同会
議

30日 (行事) ホームカミングデー (キャンパスツ
アー)

■ 10月

1日 (行事) 第97回サイエンス・カフェ札幌
(CoSTEP)

2日 平成30年度私費外国人留学生入試学
生募集要項公表

3日～26日 (会議) 第90回教務委員会 (持回り)

6日 (会議) 第1回「留学支援英語等」仕様策定
委員会

6日 平成30年度一般入試学生募集要項公
表

7日 (説明会) 北大セミナー inオホーツク

8日 (行事) 北海道大学進学相談会 (大阪)

10日 (行事) 就活戦略ガイダンス

10日～11日 (会議) 第2回「留学支援英語等」仕様策定
委員会 (持ち回り)

12日～13日 (行事) 自己分析ワークとエントリーシート
作成講座

13日 (会議) 第6回ELMS定例会議

13日～18日 (会議) 第5回高等教育推進機構運営委員会
(持回り)

14日 (行事) 新渡戸Day for Autumn

14日 (行事) 新渡戸カレッジ第1回フェローゼミ

15日 (行事) CoSTEPメディアデザイン実習×
NoMaps×札幌市青少年科学館共催
企画「没入！バーチャル支笏湖ワー
ルド」

16日 (会議) 第2回授業評価専門部会

16日～22日 国際総合入試願書受付

17日～24日 AO入試・帰国子女入試願書受付

18日 (行事) 理系総合ガイダンス

21日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回フェローゼミ
(柴田ゼミ)

22日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回フェローゼミ
(柴田ゼミ)

23日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回フェローゼミ
(玉城ゼミ)

23日 (行事) 北大OGによる就活セミナー

23日 (研修) 講演会「伝わる話し方を心がけて」
(高等教育研修センター)

24日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回フェローゼミ
(玉城ゼミ)

24日 (行事) 留学生のための就活オールガイド講
座2

25日～26日 (行事)
企業研究講座

25日・27日 (行事)
公務員の試験研究ガイダンス

26日～27日 (会議)
平成29年度国立七大学共通教育主幹
部局長会議・主幹部局事務協議会
(北海道大学)

27日 (会議) 第4回新渡戸カレッジ定例会

27日 (行事) 全学インターンシップ成果発表共有
会

28日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回フェローゼミ
(現地視察他)(7ゼミ)

31日 (会議) 第5回教育改革室会議

■ 11月

3日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回フェローゼミ
(小林ゼミ)

4日 (行事) 秋のキャンパスツアー

6日 (行事) 業界研究ガイダンス事前講座

6日～7日 (研修)
北海道地区大学SD研修「大学職員
セミナー」

7日 (行事) 経済同友会連携インターンシップ成
果発表会

8日 (会議) 入学者選抜委員会

9日 (会議) 第5回オープンエデュケーションセ
ンター連絡会議

9日～10日 (研修)
平成29年度教務事務実務研修

10日 (会議) 第4回NITOBEd教育システム将来構
想諮問委員会

10日 国際総合入試・AO入試・帰国子女
入試第1次選考結果発表

10日・13日 (研修)
ELMS講習会～授業でELMSを活用
する～(高等教育研修センター)

11日 (行事) 新渡戸カレッジ第3回フェローゼミ
(8ゼミ)

11日～12日 (行事)
新渡戸カレッジ第3回対話プログラ
ム

12日 (行事) 新渡戸カレッジ第3回フェローゼミ
(伊藤ゼミ)

13日・20日 (行事)
教員志望者ガイダンス

13日～15日・27日～29日 (行事)
業界研究ガイダンス

14日 (会議) 第3回総合教育移行専門委員会

15日 (会議) 第7回ELMS定例会議

17日～18日 (研修)
第34回北海道大学教育ワークショッ
プ(高等教育研修センター)

18日 (行事) 新渡戸カレッジ第4回フェローゼミ
(石川ゼミ)

20日～24日 (会議)
第2回大学院共通教育専門委員会
(持回り)

21日 (会議) 第4回全学教育専門委員会

21日 (会議) 第2回成績評価結果検討専門部会

22日 (会議) 第3回総合教育教務・学生専門委員
会

22日 (行事) 留学生のための就活オールガイド講
座3

24日 (会議) 第5回新渡戸カレッジ定例会

24日 (研修) 講演会「学習意欲を高め維持するプ
レゼンテーションの技法」
(高等教育研修センター)

24日～26日 (行事)
サイエンスアゴラ2017に出展
(CoSTEP)

25日 (行事) 新渡戸カレッジ第4回フェローゼミ
(8ゼミ)

26日 国際総合入試・AO入試・帰国子女
入試第2次選考日

28日 (会議) 第6回教育改革室会議

29日 (会議) 第1回新渡戸カレッジ評価委員会

30日 (会議) 第91回教務委員会

30日 (会議) 第3回高等教育推進機構学務委員会

行事予定 SCHEDULE, January-March

◆1月

- 5 (金) 授業再開
- 12 (金) センター試験準備 (休講)
- 13 (土) ~14 (日)
大学入試センター試験
- 24 (水) 水曜日の授業終了日
- 30 (火) 火曜日の授業終了日
- 31 (水) 初習外国語統一試験日 (通常授業は休講)

◆2月

- 1 (木) 木曜日の授業終了日
- 2 (金) 金曜日の授業終了日
- 5 (月) 月曜日の授業終了日 (第2学期授業終了日)
- 6 (火) 午前 第4回クラスアワー
- 6 (火) 午後 学部・学科等移行ガイダンス
- 7 (水) 学部・学科等紹介

- 13 (火) 成績報告締切 (常勤 [Web入力], 非常勤 [帳票])
- 19 (月) 全学教育科目成績Web上公開
- 19 (月) ~20 (火)
全学教育科目成績確認及び成績評価に関する申立て期間
- 25 (日) ~26 (月)
一般入試個別学力検査等 (前期日程)
- 28 (水) 正午 全学教育科目成績確定
- 28 (水) 午後~1年次進級判定
- 28 (水) 午後~3月20日 (火)
学部・学科等移行手続き (第1回志望調査~各学部振り分け)

◆3月

- 12 (月) 一般入試個別学力検査等 (後期日程)

ニュースレター 2018, No.110 目次

(巻頭言) 全学教育と教養部 …………… 白木沢旭児	1	ルーブリック評価入門ワークショップを開催 ……	17
学務委員会報告 ……………	3	講演会「伝わる話し方を心がけて」を開催 ……	18
講演会「多様な学習動機への対応」を開催 ……	4	大学IRコンソーシアムワークショップ, セミナー開催 ……………	19
講演会「Practical use of IR data, and training researchers in charge of IR」を開催 ……	4	北海道大学の入試改革に向けて ……………	20
ワークショップ「授業運営の苦悩～解決策を探る～」 を開催 ……………	5	全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に出席 ……………	20
TEACHING IN ENGLISH WORKSHOP ……………	6	特別講義 「大学と社会ー先輩からの熱いメッセージ」を開講 ー12人の卒業生が後輩に熱弁ー ……………	21
平成29年度第1回TF研修会を開催 ……………	6	「全学インターンシップ成果発表共有会」開催 ……………	23
2017年度IDE大学セミナー開催 ……………	7	経済同友会と連携した長期インターンシップ プログラムに参加した学生の成果発表会開催 …	24
北海道FD・SDフォーラム2017を開催 ……………	11	札幌クリエイティブコンベンション “NoMaps” に, 子ども向けサイエンスワークショップ 「没入！バーチャル支笏湖ワールド」を出展 …	27
シンポジウム「アクティブラーニングは 日本の教育を変えるのか」を開催 ……………	12	日誌 ……………	32
PFF WORKSHOP 2017 ……………	14	行事予定 ……………	35
Workshop on Creating Rubrics ……………	14	目次・編集後記 ……………	36
第33回北海道大学教育ワークショップを開催 ……	15		
アクティブラーニング導入ワークショップを開催 ……………	17		

編集後記

自分の大学生時代の就職活動ではOB・OG訪問はよく行われていましたが、インターンシップはそこまで行われていなかったように思います。今や中学校における就業体験の課外学習は一般的になってきており、社会に出て働くことに対する大学生の意識もだいぶ変わってきているのだろうと感じます。将来の自己実現について考えるための環境が整備されるとともに多くの機会が提供されていて、今の学生をうらやましく思います。自分の学生時代にそのような状況があったならば、今とは違う道に進んでいたのだろうかと考えたり、考えなかったり。

(海苔)

ニュースレター

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)

通算 第110号

発行日： 2018年1月30日

発行元： 北海道大学高等教育推進機構
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

編集委員：◎細川敏幸・鈴木誠・飯田直弘・岩間徳兼
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話 (011)706-7514, FAX (011)706-7521

インターネットホームページ：

<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>